様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ５ 月 １５ 日現在

機関番号：３２６６５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０４１０３

研究課題名（和文）産業遺産の記憶と“生きられた”生活世界の社会学：足尾の生活文化史聞き取りから

研究課題名（英文）The memory of industrial heritage and the sociology of lived lifeworlds:the life story approach of Ashio

研究代表者
好井　裕明（YOSHII, Hiroaki）

日本大学・文理学部・教授

研究者番号：６０１９１５４０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：栃木県日光市足尾において生活文化史聞き取りを中心とした地域調査を行った。足尾は明治以降、足尾銅山で栄えたが、1973年に閉山した。閉山後人口減少し過疎化が進んでいる。聞き取り調査では、銅山労働、労働運動、社宅での暮し、地域生協、学校教育、映画館や劇場など当時の大衆文化、閉山5年前に起きた不当解雇をめぐる裁判闘争、足尾出身者の戦争体験、閉山後の足尾の変貌など多様な語りを収集した。銅山に関する文献や生協の会報など歴史的資料や当時の貴重な記録である写真も多く収集した。資料や聞き取りデータをもとにして『ごめんください、足尾のこと聞かせてください！－科研版－』という成果報告書（300頁）を作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
足尾銅山や足尾地域は、明治以降産業発展に寄与してきたにも関わらず、社会学的な調査研究はなされていない。本研究では足尾の地域住民を対象として、労働、生活、文化、教育、祭礼、労働運動など聞き取り調査を行った。成果として『ごめんください、足尾のこと聞かせてください！－科研版－』（300頁）を作成。この冊子は足尾の社会学的調査成果としては初めてのものであり学術的意義は高い。また地元の人々など一般的に読んでもらえるよう、文章や写真など構成も工夫されており、社会的意義も高い。

研究成果の概要（英文）：We did the area study of Ashio,Nikkou city in Tochigi Prefecture. We collected the historical materials and did the lifestory interview research form about over 50 informants. We heard about many topics, such as hard labor in Ashio copper mine,labor movements, everyday life of company houses, the realities and history of the co-op Sanyou-kai, popular cultures in Asio, the judicial fight against the unjust dismissal, the experiences in the war, and the various changes of Ashio after the closal of copper mine. And we made the research book titled “Excuse me, tell me about your life experiences in Ashio area?”(300p.).

研究分野：社会学

キーワード：生活文化史　産業遺産　聞き取り調査　地域・文化　ライフストーリー

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近年、木村聖至『産業遺産の記憶と表象―「軍艦島」をめぐるポリティクス―』(京都大学学術出版会、2014 年)など近代化産業遺産や遺構をめぐる社会学的研究が出されている。本研究が対象とする栃木県足尾地域にも明治以降日本の産業化近代化を支えた足尾銅山があり地元には世界遺産登録をめざす動きがある。

また足尾と言えば誰もが足尾鉱毒事件、田中正造という言葉が連想するように、公害問題の原点の一つと言える地域である。社会学においても飯島伸子が環境問題の社会史をまとめるなかで初期の公害問題として足尾を位置づけている。また地元の研究者や運動実践者たちも公害問題という文脈のなかで地域社会や人びとの歴史をまとめている（たとえば太田貞治『足尾銅山の社会史』（ユーコン企画、1992 年)、『明るい町』編集部編『町民がつづる足尾の百年―銅山に生きた人々の歴史―』（光陽出版社、第一部 1994 年、第二部　2000 年）など)。こうした了解は間違いではないし本研究もこの了解のもとで進めたいと考えている。ただ本研究は足尾地域＝公害問題という狭く硬直した図式ではなく、より多様な暮らしの現実を含みこんだ地域としてトータルに足尾を捉え直したいと考えている。

足尾において平成 25 年から地域おこし協力隊として志村春海（本研究の研究協力者）ともう一人の男性が活動を始めた。彼らは日常、足尾に暮らす人びとと深い信頼関係を築くなかで銅山労働だけでない様々な体験的語りと出会うことになる。彼らは人びとの声に耳を傾け、語りを収集していった。1 年たったあたりで、彼らから生活文化史聞き取り調査法や資料整理などの助言を求められ、申請者自身も足尾にでかけ聞き取りにも参加した。その成果は聞き取りをテーマ別でまとめなおしたブックレット『ごめんください､足尾のこと教えてください！　地域おこし協力隊による聞き取り抜粋集[2014]』（日光市役所足尾総合支所総務課発行、64 頁、2014 年）『その２』（64 頁、2015 年）として結実した。志村たちは平成 27 年度で協力隊としての身分は終了するため、現行の聞き取りを続けることはできなくなる。そこで申請者は彼らと共に足尾地域の歴史や人びとの暮らしの語りを聞き取り続けることができるよう本科研を構想した。

２．研究の目的

近年、日本の近代化産業遺産・遺構への関心が高まっている。社会学においても文化遺産の社会学的研究の流れがあり､産業遺産の記憶と表象をめぐる優れた研究成果が生み出されている。本研究では栃木県の足尾銅山および足尾地域に焦点をあてる。ただ本研究では足尾銅山や銅山に関連する産業や生活を過去の客観的事実や遺産としてのみ捉えるのではなく、現在も足尾に暮らし続けている人びとの主観的そして相互主観的な記憶や知として捉えなおし、それらがいかに記憶され語られ、いかに“生きられている”のかを明らかにする。それらは、足尾で暮らしてきた人々に固有の個人的歴史的記憶であるとともに、足尾という地域で共有維持されてきた集合的な記憶ともいえるものである。本研究は鉱毒事件や公害問題という常識的で通俗的な図式では捉えきれない銅山を含みこんだ足尾という地域に生きてきた人びとの社会学（folk sociology)、実践的知(practical knowledges)を総合的に明らかにしたい。

３．研究の方法

地域おこし協力隊が中心とした平成 25 年度からの聞き取りの結果、40 名近くから足尾をめぐる多様な記憶や体験語りを収集できている。ただ聞き取りは体系的組織的に行われたものではなく､語りの内容も濃淡がある｡そこで本研究ではこれまでの聞き取り資料を再度読み直し、足尾地域を立体的総合的に捉え得るトピックを選定する。３年間という研究期間を考え、①銅

山労働（労働者の日常、外国人労働者との関係性や彼らとの日常など）、②社宅（銅山の経営する企業である古河が社員、労働者用に建設した平屋住宅）での暮らし（女性の仕事と労働も含む）、③銅山閉山前の状況（不当解雇裁判闘争などの労働問題、問題に対する当時の足尾の人びとの対応や評価など）、④閉山直後の足尾の状況、⑤閉山後から現在に至る足尾という街の変容、⑥生協組織、⑦治山事業、⑧学校教育等、「地域としての足尾を想像し得る中枢的なトピック」に絞り、詳しい記憶や体験を語ってくれる対象者からより深い聞き取りを行う。そうした聞き取りから得た語りを整理する作業を通して、主に戦後から閉山前後、現在に至る全体としての足尾を想像できる人びとの主観的そして相互主観的な“街やできごとの記憶”および生活をめぐる実践的な知を明らかにする。

具体的な聞き取り調査の方法としては以下の通りである。

1．足尾銅山の歴史をめぐる文献や映像資料および関連する社会問題研究文献など、生活文化史聞き取りを進めるうえで、必要な資料をできるだけ収集する。
これらの資料は、申請者と研究協力者によって行う研究会で読み、聞き取りで得られた語りの意味をいかに解釈していくのかにとっての重要な手がかりとなる。

2．これまで得られた人びとの語りを詳細に読み直し、より深い聞き取りを遂行するうえで必要なトピックを整理し、聞き取り調査を実施するメンバー全員が共有すべき実践的な知識を確認するための研究会を行う。場所は申請者の勤務する日本大学の研究室や足尾地域での行政センターの会議室で行う。

3．その後、足尾の人びとや新たな地域おこし協力隊のメンバーとも連携をとり、聞き取り対象者の選定と聞き取り実施日の調整を進め、調査を実施する。一回につき 2 泊 3 日で集中して 6 名以上の人びとから聞き取りを行う。一人あたり 2 時間を予定し、対象者の了解を得た後、IC レコーダーですべての語りを録音する。

4．調査後、申請者と研究協力者と分担して、録音の逐語起こしを進める。起こされた語りのデータは、読みやすいように形式を整え、できるだけ早く対象者に戻し、内容の確認をしてもらう。そこで内容の誤りや録音起こしでのミスなどを点検してもらうとともに、公にしてもいい内容やオフレコとして削除してほしい内容などを確認する。

5．対象者の確認が終わった聞き取り録音起こしは、地名や人名などで必要な匿名化作業をすませ、聞き取り調査一次資料として整理しておく。

6．上記のような聞き取り調査と録音起こし作業、聞き取りデータのクリーニング作業を繰り返しながら、各年で平均して 2 回さらにできればもう一回同様の聞き取り調査を実施する。

7．平行して聞き取りの実際にあわせて研究会を開催する。そこでは一次資料を検討ながら、新たな聞き取りで得られた人びとの“生きられた”生活世界の経験をめぐる語りをメンバーで共有し、さらなる深い聞き取りを可能にするうえで必要な実践知や生活する人びとの実感を互いに了解できるようにする。

8．足尾は、冬季は深い雪に閉ざされ、これまでの聞き取りで申請者が利用していた国民宿舎も閉鎖される。そのため冬季は、聞き取り調査はしないで次年度に向けて研究メンバーは一次資料のさらなる読み込み、関連文献や資料の読み込みなどの作業に集中する。

9．3 年目の最後の年は、これまでの聞き取り成果をさらに読み込み、成果報告としての冊子を完成させるため、冊子での論考執筆の内容検討や冊子の全体構成、写真等貴重な資料のレイアウトなど研究成果としての冊子の完成をめざす研究会を前半に実施し、その後各メンバーは論考執筆に集中し、草稿はメールなどのやり取りを通して、内容を討議し批判し、より充実した内容へと完成させる。

４．研究成果

研究成果として『ごめんください、足尾のこと教えてください！　－科研版－』（平成２８～３０年科学研究費基盤研究（C）「産業遺産の記憶と“生きられた”生活世界の社会学：足尾の生活文化史聞き取りから」（研究代表：好井裕明）成果報告書、300 頁）を作成した。

本書は、通常実施される聞き取り調査とは異質であり地域社会のフィールドワークとして独創性を持つ。研究の方法でも述べているように、科研費採択 2 年前から地域おこし協力隊であった志村の要請を受け、私は足尾に出かけた。当時彼らは地元のお年寄りから昔の足尾の話を聞いていたのだが、聞き取りのまとめ方や進め方などを助言し、私自身も彼らと一緒に聞き取りをした。その成果が、本書に資料として載せた『ごめんください、足尾のこと教えてください！』という 2 冊のブックレットである。足尾は鉱毒事件で有名だが、これまで本格的な社会学の地域調査は行われていない。その事実に私は驚いたのだが、協力隊が築いている地元との「信頼」関係は素晴らしいものであり、私はそれを壊すことなく調査できればと考え、あえて私は研究者として彼らの聞き取り「精度」を無理に上げることなく、「正しい」記憶や知識を根掘り葉掘り聞くといった「介入」は避けた。そうではなく、ある意味“ゆるく、無理をしない”聞き取りを続け、結果として 50 人以上の方にお話をうかがうことができた、他に文献や会報や新聞記事、写真等資料も収集し、聞き取りを単純に整理しまとめるのではなく、調査メンバー全員が足尾という地域の話をうかがい、まとめたいテーマを決め論考を書くという報告書を考えた。無味乾燥な科研調査報告書ではなく、地元の人々に読んでもらえる成果をめざし、本の装丁も工夫した。足尾の昔の写真を多用し、読んでおもしろく、見て懐かしく、昔を想起させ、読んだ人が自分自身はどうであったかとさらに記憶をたどることができる編集を全員で討議し考えた。

成果として論考を載せた主題と内容を列挙しておく。明治以降、足尾の生活基盤として機能し続けた三養会という生協組織の歴史と日常、地域に果たした意義などを語りと写真そして会報『生協三養会』という資料を基にしてまとめた。また足尾高校定時制教員として長年教育に携わってきた男性の語りをもとに、地域での職業教育の現実や閉山後の課題などをまとめた。またシベリアでの戦争体験を語ってくれた男性の聞き取りと写真などの資料をまとめた。さらに労働者への不当解雇という弾圧とそれに抵抗し撤回の裁判闘争を続け勝利した男たちの語りをまとめた。これは 1973 年に足尾銅山が閉山するがその 5 年前に労働運動へ弾圧として勇退勧告（事実上の不当解雇）を受けた 7 名の男性が処分を不当とし処分撤回と地位保全を求めて裁判闘争したという事実であり、この事実は正規の銅山史に残っておらず足尾労働者の“生きられた”歴史と言える。また毎年夏に行われた納涼祭で盆踊りの櫓に立ってずっと唄ってきた男性から「囃子方」の実際やその高い技術、閉山前と閉山後の納涼祭の変貌など地域文化の象徴として、祭りをめぐる歴史をうかがい、まとめた。また足尾にとって重要な交通手段であった国鉄足尾線の廃線に対抗して地元で行われた特別乗車運動の実際も地域の変貌にかかわる重要な人びとの動きとして位置づけまとめた。

こうした成果のもととなっている足尾の人びとの語りは、足尾という地域が、平板で硬直した「鉱毒事件」「公害問題」などの概念で捉えきれる空間ではなく、彼ら一人一人が銅山労働にかぎらず、それぞれの場所で生きてきた等身大の歴史の集積と統合から捉えられる“生きられた”生活世界であることを例証している。ちなみに本書が完成し、2019 年 2 月に足尾行政センターで報告会が行われ、私も調査から得た知見を報告した。報告会は 120 名以上の地元の人々が集まり、足尾の行事としては大盛況であったこともつけくわえておきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計１件）
１『ごめんください、足尾のこと教えてください！　－科研版－』平成２８～３０年科学研究費基盤研究（C）「産業遺産の記憶と“生きられた”生活世界の社会学：足尾の生活文化史聞き取りから」（研究代表：好井裕明）成果報告書、300 頁、出版者：好井裕明、発行年（2018）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1) 研究分担者

(2) 研究協力者
研究協力者氏名：志村　春海
ローマ字氏名：(SHIMURA, Harumi)

研究協力者氏名：三浦　一馬
ローマ字氏名：(MIURA, Kazuma)

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。